



10月 熊本市 感染症発生動向調査 速報



●百日咳の報告が増えています!!

2018年1月から、すべての患者について医師が保健所へ届出を行う感染症へ変更になりました。統計開始の昨年は18人、今年は70人の報告があり、乳幼児から高齢者まで全年齢で感染しています。百日咳ワクチンの免疫効果は4～12年で減弱し、接種をしても感染することがあります。

◆どんな病気？

1年中みられますが、春から夏に多くみられます。ワクチン接種をした小児や成人では症状が軽く、持続する咳だけの事も多いので見逃されやすく、発見が遅れ、集団発生につながる場合があります。咳の開始から約3週間ぐらひは菌を排出すると言われます。乳幼児では重症化することもあり、肺炎、脳症を合併し、特に生後6ヶ月以下では死に至る危険性もある（12%が肺炎になり、0.2%が亡くなってしまっているとされています。）ため、注意が必要です。

・感染経路…病原体は百日咳菌で、鼻、のど、気道からの分泌物による飛沫感染、および接触感染です。

◆予防法は？

4種混合ワクチン（ジフテリア・破傷風・百日せき・ポリオ）の予防接種が有効です。定期接種として生後3ヶ月から7歳半までに4回接種することになっています。

◆かかったらどうすればいいの？

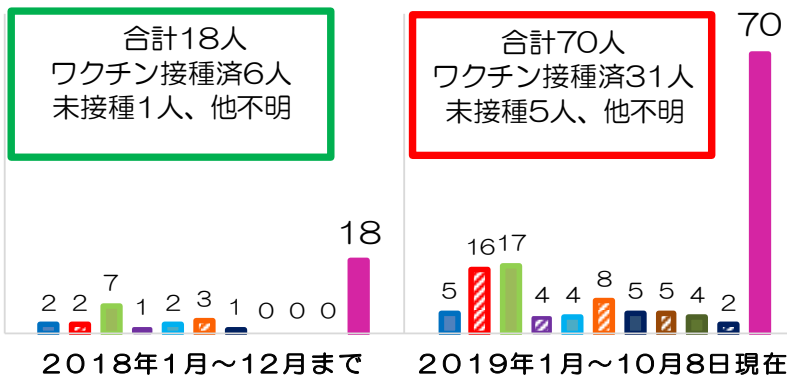
抗菌剤の服用が有効な治療法となります。適切な治療を行えば、服用開始から5日後には菌はほぼ検出されなくなります。医師から百日咳と診断された場合、出席停止となる場合もあるので、登校、登園していいか医師に確認をしましょう。

また、学校などにも報告しましょう。

◆学校保健安全法における取り扱い(2018年1月1日現在)

第2種の感染症に定められており、「特有の咳が消失するまで又は5日間の適正な抗菌薬療法が終了するまで出席停止」とされています。ただし、病状により学校医その他の医師において感染の恐れがないと認めるときは、この限りではありません。2016年11月に百日咳核酸検出法LAMP法が保険適用となり、同様の症状がある人を含めて積極的に検査を行う必要があると考えられています。

熊本市百日咳年代別報告数 2019.10.8現在



期 間	疾患名 <small>(百日咳は平成30年1月1日より全数報告へ変更になりました)</small>	疾患の増減	2019年 39週 9/23～9/29		2019年 40週 9/30～10/6 (最新)	
			報告数	定点当り	報告数	定点当り
	インフルエンザ	↑	3	0.12	16	0.64
	RSウイルス感染症	↔	53	3.31	29	1.81
	咽頭結膜熱(プール熱)	↔	4	0.25	5	0.31
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	↗	12	0.75	26	1.63
	感染性胃腸炎	↔	25	1.56	42	2.63
	水痘(みずぼうそう)	↔	0	0.00	2	0.13
	手足口病	↔	16	1.00	9	0.56
	伝染性紅斑(りんご病)	↔	14	0.88	5	0.31
	突発性発しん	↔	7	0.44	6	0.38
	ヘルパンギーナ	↔	4	0.25	5	0.31
	流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	↔	2	0.13	3	0.19
	急性出血性結膜炎	↔	0	0.00	0	0.00
	流行性角結膜炎(はやり目)	↔	18	3.60	27	5.40
	細菌性髄膜炎	↔	0	0.00	0	0.00
	無菌性髄膜炎	↔	0	0.00	1	0.20
	マイコプラズマ肺炎	↔	0	0.00	1	0.20
	クラミジア肺炎(オウム病を除く)	↔	0	0.00	0	0.00
	感染性胃腸炎(ロタウイルス)	↔	0	0.00	0	0.00